

武士道の起源と現代における意義

荒 谷 卓

明治神宮武道場至誠館 館長

海外の人々が注目する武士道精神

近年、日本では武道人口は減少しておりますが、海外では急増しています。これは色々な背景があつて一概に言えないのですが、外国人の多くが日本武道に関心を示す理由は、その精神性にあります。

ボーランドの武道家が「歐州の人々は、マーシャル・アーツ（武道）は、人を殺傷するためのものだと考えます。ところが、日本の武道には、他人を傷つけず、敵に戦いを放棄させるよう促す技や『活人剣』という考え方があることに驚きます」と指摘しているよ

うに、彼等は、日本武道の技の奥に道義的精神があることに強い関心を持つているのです。

私が明治神宮至誠館館長に就任した平成二十一年に、歐州に国際至誠館武道連盟（International Shiseikan Budo Association..以下ISBA）という団体が創設されました。

ISBAの設立の主旨には、「武道は日本の伝統文

武道を通じて、この現状を再考し人間の本来の立ち位置に戻ることを提案したい」というものでした。

フランスでは、日本より先に青少年の倫理教育に日本武道を取り入れています。革命以来、キリスト教の規範と権威に従属していた騎士道は否定されました。そして、人間個人の力で主体的に精神性を高めていくというところに日本武道の価値を認め、フランスの青少年の教育に取り入れているのです。

その講習会に、フランスの青少年倫理教育担当の大尉が訪れ、東日本大震災の際に、日本人が見せた勇気ある倫理的な行動を絶賛しました。

海外では、災害でハザード状態（危機）になりますと、地域が無法地帯になり、物の争奪状態で治安が乱れ犯罪が日常化します。しかし、日本では、どんな大きな灾害があつても、略奪や強盗のような事態が起こらないだけではなく、人々が共に助け合い、自己を共

助けてまで、他者を助ける姿は、彼らにとって驚くべきことなのです。

その理由について、フランスの青少年倫理教育担当大臣は、「日本人がこのような行動を取れる背景には、きっと武士道精神があるのだろう」と言いました。しかし、現在の日本の教育現場では、武士道精神を教育しておりませんし、東日本大震災の被災者の大多数の人々も武士道を修得していたとも思えません。ただ、日本人共通的に、利他的共助の精神があることは間違いないのです。

そこで私は、東日本大震災で日本人が見せた勇気ある利他的行動は、武士道の基盤にある日本人に身についた慣習文化である旨を説明しました。

自由競争が格差を生み出し、多くの社会問題が顕在化してきた今日、歐州ではポスト・グローバル資本主義の潮流が大きくなっています。こうした世界的な潮流と、彼らが武士道精神に関心を持つことは関連しているわけで、我々日本人が考えているよりもっと大きな意味で、日本武道の精神的意義を捉えているのです。

武士道精神の基盤としての神道

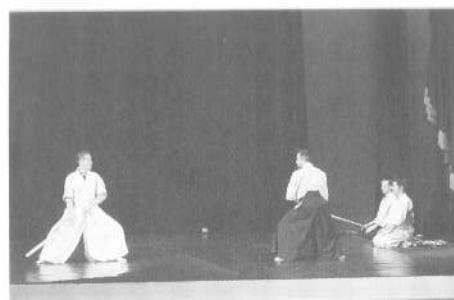


ボーランド国際セミナー

平成二十二年に、ボーランドで至誠館武道セミナー

化に根ざしたもので、今日の世界的人類遺産の中でも極めて価値のあるものの一つである。日本武道の力と簡潔な美しさは、人間を惹きつける特有の精神と結びついており、そしてその精神は日本人のエートス（性格）とも言える基礎を形成している。我々の将来の理想は、武道の稽古を通じて日本文化の伝統の真価を理解し、そこに共通的に存在するはずの我々自身の伝統とエートスを見い出すことである。それによって、我々は世界の運命を正しく豊かな道へと導くため、民族間の理解と親和を強化するに努めようと思う」と記しています。

この点について少し説明しましょう。東日本大震災があつた年の平成二十三年八月、ISBAはフランスで国際武道セミナーを開催しました。このセミナーのテーマは、「市場中心のグローバル資本主義によって、我々は本来人類が歩むべき正しい路線から著しく逸脱しつつあり、人類はおろか地球環境全体までも荒廃へと突き落とされかねない危機に瀕している。我々は、



ベルギー武道公演

研修中、彼等は任意で神道の祭典に参加しますが、「信仰の義務付けが存在しない神道は素晴らしいと思います。これは私が今まで出会ったことのない宗教觀です。神道では、厳格な規制や考え方が無いために幅広い多様性と自由が生まれるのです」とレポートしています。

また、「日本の『調和』の精神は心を和らげてくれました。調和と共助の文化を特徴とする日本社会では、私達は皆、恩恵を与えてくれた祖先に借りがあり、その借りを次世代に返す役割があると考えます。この恩恵に対する「感謝のこころ」は伝統的社會では受け継がれていても、個人主義的な現代社會では失われています。日本の社會には『感謝のこころ』がしつかりと認識され、存在していることを知りました。この『感謝のこころ』が、日本だけでなく世界の多くの多くの文化で共感できる価値觀だ

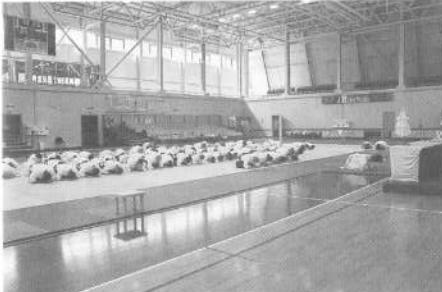
留まっています。

研修中、彼等は任意で神道の祭典に参加しますが、「信仰の義務付けが存在しない神道は素晴らしいと思います。これは私が今まで出会ったことのない宗教觀です。神道では、厳格な規制や考え方が無いために幅広い多様性と自由が生まれるのです」とレポートしています。

日本人の中にはこういう受容と和の文化が自然に根付いていると言うことは、他の外国人も皆、共通して指摘するところです。

日本の神社では、誰の祈りも「きこしめし（聞いてくれる）」、「人々の生き方を「みそなわし（観てくれる）」、人々の心を「しろしめす（知つてくれる）」神々がおられます。日本人が当たり前だと思っている、この受容の文化が非常に大事で、価値あるものだと彼等は指摘しているのです。

神道の生成思想と武士道



ロシア国際セミナーでの神道祭典

欧州においては、中世におけるキリスト教の布教と近代の世俗主義によつて社会の価値觀が根底から変えられ、それまでの民族信仰は根絶やしにされてしまいました。彼らの元々の民族的価値觀が、一体どのようなものだったのか彼ら自身が分らなくなっているのです。それに比べて、日本

を開催した時、主催のボーランド人が、祭典で使用した注連縄や幣帛を頂戴したいと言つてきました。ボーランド人は九〇%以上がカトリックですが、実は、カトリックに改宗する前にはスラブの民族神話があり、その民族信仰の様子を描いた絵が残っています。それはまるで、神道の祭祀の様子と一緒にでした。

同じように、ドイツでの武道セミナーで神道の祭典を執り行つたときも、神道の祭儀はゲルマン人の森の信仰そのものだと言つていました。ノルウェーでは、伝統的に日本と同じ上棟祭をしていますが、日本にて初めてその意味が分かつたと言います。

ロシア国際セミナーでの神道祭典

歐州においては、中世におけるキリスト教の布教と近代の世俗主義によつて社会の価値觀が根底から変えられ、それまでの民族信仰は根絶やしにされてしまいました。彼らの元々の民族的価値觀が、一体どのようなものだったのか彼ら自身が分らなくなっているのです。それに比べて、日本

は、弥生時代からの信仰儀式をいまだに生きた信仰として守っています。そこに彼らは、人類共通の普遍的価値を感じ、ポスト・グローバリゼーションのトリガード（引き金）になるのではないかと考えているのです。

人類共通のエートス（道徳的氣質）が日本にあるというのは、そういう意味なのです。

平成二十三年には、同じ様な趣旨の組織がロシアに創設されました。至誠館武道共同体（Community Shiseikan Budo Dojo : C S B D）という組織です。この組織の設立趣旨には、「武士道は私達に、人間の原点に戻ることを教えてくれます。心と精神と肉体が調和し、正しい判断のもと誠実に道徳的に行動することや、他人の利益のために自己を犠牲にすることを恐れない日本の武士道は、世界に類を見ない崇高な精神です」とあります。

彼らが言う「日本人の自己犠牲の精神」とは、具体的には「神風特別攻撃隊」です。戦後日本人が自ら否定して来た「神風特別攻撃隊」の英靈の行為は、ロシア人のみならず、ギリシャでも、スイスでも、ドイツでも尊敬の念を持つて受け止められています。

海外の人々の神道観

明治神宮至誠館では、武道と神道を研修する海外の

度に凝縮したところでビッグバンが起きて、エネルギーの拡散、そして凝縮が繰り返され、凝固したエネルギーが物質となり星が出来た。物質は引力というマインアースのエネルギーによりブラックホール化し、極限状況でまた非物质のエネルギーに変換する。このようないエネルギーの循環が繰り返され、今なお宇宙が一つの生命体のように活動していることは、数々の実験で証明されているそうです。

これは、ヨーロッパの人々にとつて非常にショッキングな実験でした。特にキリスト教の信仰者やニュートン力学に閉じこもつた科学者には、今まで正しいと思っていたことがどんどん否定されていく。非常にショッキングなことです。

そこで、日本の神話の宇宙観、自然観、人間観の話になりました。

『古事記』の冒頭は、「天地の初まり、高天原に、天之御中主神（あめのみなかみのかみ）が成った」と記してあります。これは、宇宙の最初は、先ず

言います。切り殺すとか、切り倒すという発想を超えた、「斬りむすび」と言う言葉には、戦いにおいてさえも、敵の殺傷ではなく、敵との共存共生を目指す「産靈」の思いがこめられています。

日本の武の神は、日本神話の中の、「国譲り」に出でています。

高天原の使者である武甕槌大神（たけみかづちのおおかみ）、この神様は鹿島神宮の御祭神で、武の神様ですが、この武甕槌大神が大国主神（おほくにぬしのかみ）と国譲りの交渉において、天孫によるしろしめす統治、すなわち、権威や権力ではなく、人々の心を知る統治が大切なのだという話をします。

大国主神はこれに納得します。しかし、気性の激しい息子の建御名方神（たけみなかみのかみ）は賛同せず、武甕槌大神に戦いを挑みました。

いざ戦うと、武甕槌大神の武威は凄まじく、圧倒された建御名方神は、逃げに逃げて諏訪湖の湖畔まで来て降参をしました。これに対して、武甕槌大神は、その息子の建御名方神は賛同せず、武甕槌大神に戦いを挑みました。ここには、勝った者が負けた者を尊び敬い、共存共生の道を歩むという思想が出て来るのです。

日本の武神は、戦いの後は相手を尊び、その尊厳を



御岳の禊行

ギーの拡散、そして凝縮が繰り返され、凝固したエネルギーが物質となり星が出来た。物質は引力というマインアースのエネルギーによりブラックホール化し、極限状況でまた非物质のエネルギーに変換する。このようなエネルギーの循環が繰り返され、今なお宇宙が一つの生命体のように活動していることは、数々の実験で証明されているそうです。

これは、ヨーロッパの人々にとつて非常にショッキングな実験でした。特にキリスト教の信仰者やニュートン力学に閉じこもつた科学者には、今まで正しいと思っていたことがどんどん否定されていく。非常にショッキングなことです。

『古事記』は当て字を使って「産巢日」と記していますが、漢字の意味を考えて記してある『日本書紀』では「產靈」と記しています。現代語で言う「むすび」です。つまり、日本神話の宇宙観は、万物万象が一元であり、自然と人間は一体であり、生命は循環するという考え方で、これは、まさしく最新の宇宙論そのもの様子のたとえです。

武道では、これを陰陽一体といつて、氣(エネルギー)の使い方の一つの理合いです。心身の中心である丹田に氣を充実させ、丹田を中心に氣を集中して循環・還元させるわけです。

よく、「武」とは矛を止める意味と説明しますが、日本の武の解釈は、「武」は「神武」が語源で、読みは「じんむ」つまり「神産む」です。ですから、「武」という字の持つ意味は「創造」であるのです。

この武道セミナーでは、武道の産靈についても少し詳しく説明しました。

例えば、剣と剣を合わせることを「斬りむすび」と

損なわざ祀ったのです。これが、神武不殺を源とする武士の礼といわれることの根底の発想になっています。

私は、ドイツ留学中にケルンの大聖堂を訪れました。ケルンの名称は、ローマの植民地という意味だそうです。ローマ・カトリックの大聖堂の真下にはゲルマンの御社跡があり、それが発掘されて見学出来るようになっています。つまりローマ軍が侵攻した時に、意図的にゲルマン民族の神の社を潰して、わざわざその上に教会を建てキリスト以外の神を抹消していったのです。

ゲルマン民族もスラブ民族も、あるいは世界中の多くの民俗信仰は、こうして強制的に一つの宗教の神(価値観)に統一された歴史から、先ほどのボーランド人、ドイツ人、ノルウェー人のように自分達の本来の民俗信仰を完全に失いました。

日本では、全国それぞれの土地に、その地の自然を司る産土神様や郷の氏神様等が祀られた神社が数多く残っています。これはつまり信仰上の排他的活動はしなかつたという証です。

戦略論にみる日本人の価値観

戦略論では、クラウゼヴィッツと孫子が有名ですが、

この戦略論は、敵味方論になつております。敵は自分の価値に同意しない絶対的対立者であるので駆逐・撃破することを原則とします。現在の自由競争主義、グローバル・スタンダードの世界秩序は、クラウゼヴィッツや孫子的な戦略論が適用されます。

では、日本の戦略論の代表である、大楠公（楠木正成）の遺訓を見てみたいと思います。

兵を学ぶ法は、心性を悟り庶民を親愛するを上とし、計謀によって学ぶを中とし、戦術をむさぼり習うを下とする。（中略）

将に徳あるときは、敵の兵必ず我兵となり、敵の民我民となる。

将に勇のあるときは、敵の威我威となり、敵の利もまた我利となる。

将に智あるときは、敵の謀我謀となし、敵の利能我能となる。

この三徳を以て、明らかに方法を明察し、敵の謀に乗じて、却つてこれを覆す、これ名づけて上將の軍法とす。

中将は、自らその徳を積まず、その功を求め、ただ敵の謀を察し、その計略を欺き、我謀を多くして、敵を殺さんことを用いて、敵の生ずることろを知らず、十度戦いて十度勝と言えども、未だ

かつてその太平を知らず、これ中将の法なり。

下将は、ひとえに戦いを好んで、利を争い、士民を使うに怒りを以てし、人を従えるに専ら殺罰を用い、己の勢いを頼んで敵の智謀を悟らず。（以下略）（『大楠公遺訓』。望楠社。昭和十六年刊）

大楠公が「上」としたのは、「心性を悟り庶民を親愛する」兵法です。調和と均衡をもたらす戦略により、敵の兵も、敵の民も、敵の謀も、敵の利も、敵の威も、敵の能力もすべて我のものになるということです。傑出した和の兵法です。事実、彼は圧倒的に少ない兵にもかかわらず庶民の力をもつて鎌倉幕府を倒しました。

「中」の将は、「調和と均衡」の考えがないものだから、十戦十勝しても、世の中を平和にできない。近代以降の欧米の戦争を見れば、言い得て然りです。

「下」の将に至つては、調和どころか辺りかまわず対立をせつせと作るばかりで、結局は自滅することになります。

クラウゼヴィッツの戦争論も孫子の兵法も優れた理論であります。敵は敵、味方は味方という前提です。ゲームで言えば、チエスのようなものです。ボード上から敵を抹消すれば勝利となります。しかし、日本の将棋では、敵の駒は自分の駒として使えます。敵兵を殺してはいいないです。敵の兵も自分の兵になり、敵の駒も自分の駒になります。

また、天皇の御位が、国民が幸福であるように常に祈るためにあると、それが記されております。祈りは、「意を宣る」という意味で、人のもつとも強い意志表示です。

森羅万象は一つであるという宇宙観・自然観・社会観に基づき、我が国は建国しました。それは、神武天皇の建国の詔に明記されております。

夫大人の制を立て、義必ず時に隨う。苟も民に利有らば、何にぞ聖造に妨わん。且た當に山林を披き払い宮室を經營りて、恭みて宝位に臨み、以て元元を鎮むべし。上は即ち乾靈の国を受けたまう徳に答え、下は皇孫、正しきを養いたまう心を弘めん。然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩いて宇と為ん

神武建国にみる日本国家の理念

これは、クラウゼヴィッツや孫子より一段上の戦略的発想です。現代は、グローバル資本主義の市場拡大のため、敵は敵、市場の競争原理に従わないものは武力で制圧ということをしている。これでは永久に安定した秩序の構築は出来ないでしょう。従つて、テロとの戦いは、どんどんエスカレートして、終わりが見えて来ないのです。大楠公の軍法「敵をして、敵の民を我が民とする」。そういう考え方を基にしないと現状の問題は解決しないでしよう。

民は、我が民となる発想が日本の戦略にはあるのです。

これは、クラウゼヴィッツや孫子より一段上の戦略的

こと、亦可からずや。

國の制は、國民が幸福になることを第一に考え、時々の事情を斟酌して柔軟でなくてはいけない。個人や特定階級による專制支配、あるいは、法に規定した価値が絶対であるとし、人間が法に支配されるというような考えではありません。

また、天皇の御位が、国民が幸福であるように常に祈るためにあると、それが記されております。祈りは、「意を宣る」という意味で、人のもつとも強い意志表示です。

天皇と国民が心を一つにして、天下に一つの家のようないくつかの國（國家）を作り為すよう、共に祈り努力しようとあります。だから國の名も「大和」と定めたのです。

聖德太子が十七条の憲法でいう「和をもつて貴しとなす」も、明治天皇が五箇条の御誓文に記した「万機公論に決すべし」も、そして、今上陛下の「國民を思ひ、國民のために祈るという務めを、人々への深い信頼と敬愛をもつてなし得たことは、幸せなことでした」（平成二十八年八月八日）とのおことばに感激を覚えずには居られません。我々國民が、価値あるものとする「思いやり」「絆」等も全て「和」の精神です。

本誌「日本」の平成二十五年十一月号に拙稿「徳富蘇峰、終戦半年後の皇室論」を掲載して頂いた。その冒頭に記したとおり、小田原市国府津の拙宅から一駅隣の二宮町に、立派な「徳富蘇峰記念館」がある。また、その末尾に付記したごとく、同館には平泉澄博士の蘇峰翁あて書翰が四十二通所蔵されている。(他の一通は翁の歿後ご遺族あて)

しかも、昨年十月中旬、この記念館を訪ねた後藤真生氏(モラロジー専攻塾生)が、それ以外の一通(三枚)を見つけ、マイクロフィルムからの複写を研究室へ届けてくれた。ただ、申し訳ないことながら、多忙に紛れてファイルに入れられたままで月を越した。

そして昨年十一月二日の夜、自宅の書斎から遠望でかかる太平洋をぼんやりと眺めながら、先般(九月二十四日)七十年祭を斎行させて頂いた清水澄博士(最後の枢密院議長)が入水された熱海の方に想いを馳せていました。その時、ふと机上の複写を取り出して拝読するうちに、非常な感動を覚えた。

「寒林子」先生から「頑蘇」翁への「感想」文

モラロジー研究所教授

平泉先生の六十年前の追悼文

そこで、蘇峰翁の履歴を確かめるため、タブレットで検索したところ、翁の御命日は奇しくも昭和三十二年(一九五七)の十一月二日夜、つまり、この日は満六十年祭の当夜だったのである。こうなると、もはや放つておけない。早速に手もとの『山河あり』所収「徳富蘇峰先生」(初出『日本』昭和三十二年十二月号)を披くと、次のように記されている。

「虫の知らせといふものであらうか、十一月二日の朝、徳富蘇峰先生に就いて、一文を草したいと思つて、藏へ入つて、先年(昭和二十六年)先生からいただいた明版『唐宋八家文』を取り出してきたところ、間も無くラジオは、先生の重体に陥られた事を告げ(中略)、その夜の九時半、遂に長逝せられたと報ぜられた。(中略)

九十五歳の長寿は(中略)清節の実証の為に必要

第65回 全国高校生・大学生・青年のための 千早鍛錬会

日本の伝統と日本精神の原点を楠木正成公ゆかりの吉野と千早で学びませんか。

主要講義・講話

吉田松陰先生「松下村塾記」

金沢工業大学教授

平泉 隆房 氏

海洋国家日本のすべきこと

東海大学教授

山田 吉彦 氏

天皇と皇室について

國學院大學講師

高森 明勲 氏

幕末の志士たちと人物伝

皇學館大学准教授

渡邊 穀 氏

史跡見学

千早・赤坂城址、吉野、後醍醐天皇御陵、如意輪寺ほか

日本文化大学特任教授

堀井 純二 氏

参加要領

○開催日 8月17日(金)午後1時
～19日(日)午後2時

○場所 奈良県吉野町吉野山
旅館 歌藤

○参加資格 高校生・大学生・社会人
(男女・職業を問わず、40歳未満)

○参加費用 10,000円
(テキスト代、宿泊費を含む)

○申込締切 7月31日(火)

参加申込先

〒504-0837 岐阜県各務原市
那加郷田町142(横山 泰方)

一般財団法人 日本国学協会

千早委員会事務局

TEL&FAX 058-383-8744

E-mail:nihongakuyoko@yahoo.co.jp



ポーランド国際セミナー

こう考えて行きますと、これからグローバリゼーションの方向性をどうするかという大きな課題の中で、世界の人々が、ポスト・グローバル資本主義を模索していく段階だと思いますが、実は、日本人は答えを持っているのではないかという気がしているのです。家や郷土を大事に、共助の慣習を積み重ねて来た歴史

が、和を尊ぶ社会倫理に昇華し、無自覚で利他の精神を發揮出来るまでに進化したのが日本文化です。武士道精神とは、さらに自己犠牲もいとわず和する社会に貢献する崇高な精神です。私は、日本民族の継承して来た和の文化価値観を、武道を通じて世界中の人々に一所懸命に発信して、日本文化には、今の世界にとって必要で崇高な価値観があるのだということを、しつかり伝えて行こうと考えています。

そして、大楠公が「正成一人なお生きていると聞こし召せば、聖運ついに開かれるべしと思し召せ」と奏上したように、我一人いれば大丈夫の気概を持つて、日本を、そして世界を変えて行こうと思います。

が、和を尊ぶ社会倫理に昇華し、無自覚で利他の精神を發揮出来るまでに進化したのが日本文化です。武士道精神とは、さらに自己犠牲もいとわず和する社会に貢献する崇高な精神です。